



修学旅行 1 ○○○の朝は早い



—— ダッ。ダダダダ、ダッ。

わずかに朝日の射すうす暗い廊下に一人のお坊さんが現れ、“きっ”と前をにらみながら、その長い廊下を一気にぞうきんがけする。続いてナレーションが響いた。

「永平寺の朝は早い。」

朝3時に起きて“永平寺の一日”というビデオを視聴し、その後座禅を組んだ。高校の修学旅行2日目の朝は、こうして始まった。教師になってから修学旅行の引率には何回も行ったが、そのたびになぜかしら何十年も前に見たビデオのこの場面が、鮮明に浮かんでくるのであった。

永平寺のお坊さんの朝が早いのは、そりゃあもうたいへんよくわかったのであるが、なんで修学旅行中の我々まで朝3時に起きなければならないのか、この旅を企画した

高校の先生達に対する相当な疑心と憤懣やるかたない思いが交錯する中で、それは寝ぼけまなこの半覚醒の意識に強烈に刷りこまれた記憶なのかもしれない。

とかなんとか職員室の席でぼーと考えているうちに、校門の向こうに最初の車が停まるのが見えた。ドアから降りて来たのはK音さんだった。週の初めには在校中に体調を崩し、おばあちゃんが学校まで迎えに来てくれていた。

「これから、すぐ病院に行きます。修学旅行まではまだ3日あります。きっとよくなります。」

そんなおばあちゃんの思い、そして「お姉ちゃん修学旅行に行けるかなあ。」と姉に先んじて体調を崩したことを気にしていた弟のH利くんや家族みんなの願いが通じて、意気揚々、元気に颯爽と今日の日を迎えていた。

続々と子ども達は集まり、順風満帆、余野小学校の修学旅行はスタートした。